

山岳域における大気化学・物理に関する国際シンポジウム 2017 の開催について 2017 Symposium on Atmospheric Chemistry and Physics at Mountain Sites (ACPM2017)

認定NPO法人富士山測候所を活用する会の富士山頂観測10周年を記念し、ACPM2017実行委員会（委員長：富山史郎・埼玉県環境科学国際センター総長、副委員長：大河内博・早稲田大学教授、三浦和彦・東京理科大学教授）は、2017年11月6日から11月10日までの日程で、静岡県御殿場市において『山岳域における大気化学・物理に関する国際シンポジウム2017』を開催します。

開催趣旨

ACPM2017（山岳域における大気物理・化学に関する国際シンポジウム2017）では、山岳域における大気物理・化学を中心とした研究分野に携わる世界の研究者や技術者が一堂に会し、多数の発表・討議を行います。特に、大気中の物質による山岳域の汚染、山岳域での観測施設を利用した地球環境の監視など、山岳を中心とした自然環境での大気に関する研究成果を紹介し、環境問題の解決の方針を探ります。

2010年に開かれた第1回会議はスイスの名峰ユングフラウ、アイガーなどを望むインターラーケン、2014年の第2回会議は米国のロッキー山脈を望むコロラド州デンバーにて開かれ、各国から約100名が参加しました。今回開催される第3回会議にも、世界10か国から約100名が参加する予定となっております。

世界で最も急激な経済成長を続ける東アジア域の風下に位置する日本では、山岳域でのPM2.5等の大気環境汚染の研究にとって絶好の地理的状況にあり、世界各国との研究交流・情報交換を通じて研究推進が期待されます。山岳域における大気の研究の歴史の長い米国、欧州諸国からは気候変動の検知や予測に関するさまざまな研究が、アジア域の諸国からは、急激な経済発展にともなう健康影響が深刻となっている大気汚染物質の検出と汚染状況の把握、大発生地域からの輸送の影響などが発表される予定です。

会議の目的

本会議は、山岳域における大気や水に関わる物理・化学を中心とした研究分野に携わる世界の研究者や技術者が参集し、山岳域の汚染、山岳域での観測による地球環境の監視など山岳を中心とした自然環境での大気や水に関する研究成果を紹介し、大気や水に関わる環境問題の解決の方針を探ることを目的としています。

人が多く住む平地ではなく「山岳域」で環境を研究する意義は、山岳域は自然がはからずも作ってくれた(a)観測タワーであること、(b)環境のリトマス試験紙とみられること、(c)水資源の供給源・貯留池であることによります。たとえば、大気汚染物質が大発生源から1000kmを超える距離を運ばれて地球規模の汚染をもたらす「長距離輸送」を捉えるためには、ごく近くにある汚染発生源の影響をさけるために観測タワーを建てますが、1000mを超えるタワーは自然の山以外には存在しません。

また、地球の温暖化など気候変動の影響は、北極・南極などの高緯度の地域と標高の高い山岳域に、最初にかつ顕著に現れます。例えば、氷河の後退、高山植物など植物相の変化など、山の環境自体が気候変動を敏感に察知するリトマス試験紙となっています。

以上のように、研究の成果は、良好な地球環境の持続性、つまり人類の安全・安心に直結するものであるため、国際会議によって更なる学問の進展を図ろうとするものです。

開催概要

開催期間:	2017年11月6日(月)～11月10日(金)
開催場所:	御殿場高原リゾート・時の栖(ときのみか) 静岡県御殿場市神山719番地
主催:	山岳域における大気化学・物理に関する国際シンポジウム2017(ACPM2017)実行委員会
共催:	認定NPO法人富士山測候所を活用する会 東京理科大学総合研究院 大気科学研究部門
助成:	公益財団法人鹿島学術振興財団、一般財団法人新技術振興渡辺記念会
協賛:	東京ダイレック(株)、日本カノマックス(株) (株)ガステック、紀本電子工業(株)、グリーンブルー(株)、柴田科学(株)、東亜ディーケーケー(株)、 (株)日本医科器械製作所、(株)ブリード、(株)堀場製作所、ムラタ計測器サービス(株)
後援:	静岡県、山梨県 大気環境学会、日本エアロゾル学会、日本環境化学会、日本気象学会、日本大気化学会、日本大気電気学会
公式サイト:	http://acpm2017.jp/

